



2025年4月22日発行

編集・発行：中央教育研究所(株) 〒730-0013 広島市中区八丁堀15-6

<https://www.chuoh-kyouiku.co.jp>



中土井鉄信の「地域一番の繁盛塾になるための最強法則」 vol.158

< 経営者に必要なもの！ >

春期講習が終わり、新年度募集も小休止の時期ですが、2025年の新規生の獲得は、順調だったでしょうか。私の聞き取りでは、3月の3週目から動き出し、講習中も動いて、この時期、少し落ち着いてきたというところでは、塾控えは、相当なものだと思いますが、それでも、まだまだ集める工夫は出来ると思います。

その一つが、Googleマップの口コミの活用です。去年から、私の顧問先では、この口コミを集めるアドバイスをし、ローカル検索では随分と効果が出てきました。口コミ獲得目標を15件以上にし、評価の目標は5を目指して、在籍生の保護者をお願いする、入会の手続き時に、保護者に塾を選んだ理由や塾に対する期待を書いてもらうように頼んで、獲得していただきました。読者の皆さんも、口コミの活用を考えてください。きっと集客に寄与するはずです。

さて、2024年は、学習塾の倒産件数がここ10年で一番多くなりました。塾経営者の引退時期も重なったと思いますが、経営難で廃業になった小さな塾が多かったのです。2020年のコロナ禍で打撃を受け、徐々に塾経営の質が落ち、2022年から23年にかけて、物価が上昇し、塾控えが決定的になった結果、生徒が集まらなくなったということだと思います。つまり、時代の変化にしっかり対応できなかったということかもしれません。

実は、大きな時代の変化は、以前にもありました。変化の中身は違いますが、過去2回あったのです。一つ目は、学習塾の勃興期である1960年から80年代です。その当時は、社会全体が右肩上がりの状態として起こりました。ですから、学習塾の経営環境は誰にとっても歓迎するもので、この時代は、誰がやっても学習塾は成功すると言われていました。ただし、労働組合等に邪魔をされなければ、ですが。この時代が、塾経営にとっては最高に良い時期でした。

この栄華は、長くは続きませんでした。その後に淘汰の時代が来ます。約20年続いた学習塾の成長期が、突如終わりを告げます。二つ目の劇的変化は、1992年のバブルの崩壊です。1970年代80年代の価値観が吹っ

飛んで、価値観の混乱が生まれ、今日まで日本は、その影響を引きずっています。この時期から、塾経営は、経営力がまさに問われ出しました。企画力、人材登用力、組織力、先見性、本質理解力等々、経営者の時代に合った、そして、その時代をちょっと先取りした感覚が、優劣を決めました。まさに、経営者の世界観、社会観、教育観、人間観が、底流で問われたのです。その象徴が、皆さんも知っているダイエーの中内氏や西武の堤氏の隆盛と衰退、そして、セブンイレブンの鈴木氏やソフトバンクの孫氏の成功物語です。

このように、社会変化の大波に右往左往しながら、学習塾は、続いてきたわけですが、この50年間、大なり小なり生き残っている学習塾を見てみると、経営者が自分なりの世界観・人間観をしっかり持って塾経営しているように思えます。組織の作り方、校舎の作り方、社員の姿勢や言動、チラシやHPに書かれていること、それらを見ると、長く続いてきた学習塾には、本質に届く世界観なり人間観があるのではないかと思います。

これから先、学習塾が生き残っていくためには、世界観や社会観、人間観が、どうしても必要になってきます。経営者は、深く人間を知ること、社会を知ること、商売を知ることが必須です。読者の皆さんの塾が、勝ち残っていくために、常に知ること、理解することを怠らないようにしてください。2025年度のスタートです。素晴らしい年度にしたいものです。

【MBA編集後記】

中土井監修・学習塾のためのスキルアップ研修 「塾人プロ養成研修」

学習塾は、教室にいる「人」によって大きく左右される業界です。この研修では、生徒・保護者の信頼を集め、人の集まる教室を創るテクニカルスキルを体系的に学びます。東京・大阪の2会場で全3回の開催(単発受講可能)。若手社員のレベルアップや研修担当者のブラッシュアップにご活用ください。

東京会場…4/25(金)、5/28(水)、6/25(水)

大阪会場…4/23(水)、5/27(火)、6/24(火)

★詳細とお申し込みはこちらから★

<https://management-brain.net/mbaseminar03>

数字でみる学習塾経営・業界のトレンド vol.122-1

ちょっと小中学生の頃を思い出していただけますか。
皆さんは好きな教科とか嫌いな教科、ありました？

私は図画工作・美術がダメでした。好きだったのは社会科。とくに好きだったのは歴史関係で、小学校高学年から中学へと学年が上がるにしたがってその傾向がどんどん昂じていったように思います。

それはさておき、「蓼(たで)食う虫も好きずき」という諺がありますが、誰にでもたいてい好きな教科と嫌いな教科はあるようですね。ニフティキッズがこんな調査をしています(ニフティ(株)「みんなのホンネ調査レポート『勉強』」／調査期間：2024年12月10日～25年1月6日／有効回答：2,098人)。

Q. 次の5教科の中で一番好きな教科は？

	全体	小学生	中学生
社会	20.5%	20.7%	20.4%
算数・数学	18.7%	19.5%	17.2%
国語	17.0%	16.2%	18.0%
英語・外国語活動	14.0%	11.9%	18.6%
理科	13.4%	15.2%	10.3%
好きな教科はない	16.4%	16.6%	15.4%

Q. 次の教科の中で一番苦手な教科は？

	全体	小学生	中学生
算数・数学	42.8%	42.6%	43.6%
英語・外国語活動	14.9%	13.9%	17.0%
国語	10.8%	11.7%	9.2%
理科	10.6%	10.3%	10.8%
社会	10.1%	9.4%	11.7%
好きな教科はない	10.9%	12.1%	7.7%

もう1つ、学研教育総合研究所の調査もみてみましょう((株)学研「小学生の日常生活・学習に関する調査」「中学生の日常生活・学習に関する調査」／調査期間：2024年11月／有効回答：小学生1200人・中学生600人)。

Q. 一番好きな教科

	小学生	中学生
国語	8.9%	7.8%
算数・数学	18.3%	19.8%
英語・外国語活動	2.3%	14.3%
理科	5.5%	6.5%
社会	5.5%	12.0%
好きな教科はない	9.1%	12.8%

Q. 一番嫌いな教科

	小学生	中学生
国語	17.8%	13.0%
算数・数学	22.6%	23.5%
英語・外国語活動	4.7%	15.7%
理科	2.6%	7.0%
社会	3.2%	7.8%
好きな教科はない	26.6%	14.7%

ニフティ調査は主要5教科の中から1つ選択、学研調査は保健体育や音楽、図工、道徳等々、他教科も含めた中から1つ選択(本稿では5教科以外は省略)という違いがあるため、両調査のパーセンテージにはかなりの相違がありますが、いずれにしても我々が考えている以上に教科による好き・嫌い、得意・苦手というのはあるんですね。

ところで、「好き・嫌い」「得意・苦手」ということでは、例えば、個別指導塾の入塾面談のさいなど保護者から、「ウチの子は英語は好きなんですけれど、数学が苦手です。数学をなんとかしていただませんか」と依頼されることが少なくありません。

私は塾長さん方に、そんなときは「わかりました」というと同時に、「じゃあ、とりあえず英語から始めましょうか」と提案してもよいのではないかと申し上げています。

数字でみる学習塾経営・業界のトレンド vol.122-2

保護者はもちろん、怪訝な顔をされるでしょう。が、理由はシンプルです。

「嫌い」「苦手」になったのにはそれなりの原因があるはずです。

例えば、学校の授業では年齢・学年に合わせて相応の知識・技能を教えることになっていますので、少しばかり発達年齢の遅い子には理解できないこともある。理解できないまま授業が進んでいけば苦手になるのは当然でしょう。

また、例えば幼いときに虫に刺されて痛い思いをしたことがある。とすれば「イモムシ」や「昆虫」に関わる教科などが嫌いになるのも無理からぬところです。

このように原因は千差万別でしょうが、ひとたびある教科が「嫌い」「苦手」となると困ったことが起きます。教科に対する壁が出来てしまうんですね。そして、自分の力ではその壁を乗り越えられないと思うようになる。さらに、そう思うようになれば言うまでもなく当該教科の成績は下がりますので、もっと困ったことが起きる。「平均以下効果」という心理的な現象なんだそうですが、ヒトはもともと自己と他者とを比較する動物であって、劣位に見られることに苦痛を感じる。それゆえ、平均以上だと自覚している特性や能力は「大事なもの」と見做す一方、平均以下だと自覚しているものについてはたいした価値を見出さない。つまりは興味をいだかなくなる、無関心になってしまうのだそうです。こうなってしまったらもうお手上げです。ちょっとやそつと教えたくらいではどうにもなりません。

他方、お子さんが好きだという英語から始めればどうなるか？

好きなのでちょっと手伝えば自ら進んで勉強する



進んで勉強するので成績はどんどん上がる



成績が上がるので自己肯定感が上がる
(アタマがよいと勘違いするようになる)



自己肯定感が上がるので他教科の学校授業も
それなりにしっかりと受けるようになる
(自信をもって授業に臨むようになる)



他教科の成績も上がる。

好循環が出来上がるんですね。

狙っているのはこの好循環です。

ただし、自己肯定が上がるから他教科の成績もとはいっても、やはり放っておいてはそう簡単にはいきません。

そこで私は数学にも少しだけ触れるようにとお勧めしています。

かりに塾の個別指導の授業が週2回、各80分あるとしましょう。数学の教科書を持参させ、毎回5分ないし10分だけ、学校の授業はどこまで進んだか、何を勉強したか生徒に話させるんです。その上で、当該単元や分野に関わりのある雑談をする。言うまでもなく数学に「興味」を持たせるための雑談ですから、もともとその子が関心を持っているものとそうした単元・分野とを繋げるような雑談が望ましい。例えば野球部に所属している子なら防御率の算出方法とかゲーム差の求め方とか…。

こうして少しずつ数学に対する興味・関心を喚起し、「嫌い」「苦手」という意識を漸減させていくわけですね。時間はかかるかもしれませんが、これを続ければいつの間にか数学も得意になっていくと私は考えています。

お察しいただけたと思いますが、こと勉強に関しては私は「興味・関心」を最も重視しています。

「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する」——皆さんよくご存じの古代ギリシアのアリストテレスの名言に言うとおり、ヒトは元来、何にでも興味を持って知りたがる動物です。3、4歳の幼児のお相手をしていればイヤになるくらい理解できることじゃないでしょうか。

それが何かの要因で障害されれば「嫌い」「苦手」になり、逆にそれが高まるよう仕向けられるようなことがあれば「大好き」にも「大得意」にもなる。

新年度が始まっています。雑談で構いません、「興味・関心」の喚起に十二分に留意しつつ授業を進めていただきたいと思います。

PS・コンサルティング・システム

小林 弘典